

The Спасибо JOURNAL of MEDICINE

ARRIVED AT 8/25

AUGUST 31

vol. 4

カザフスタン活動記感想 ～IPPNW全体を通して～

Masashi Kuriyama, Airi Kuruma, Kanako Yokoyama, Kazuya Maeda, Daiju Ueda

ABSTRACT

最終日および
全体を通しての感想

栗山政士
來間愛里
横山加奈子
前田和也
植田大樹

栗山 政士



fig.1: 最終日のセッション

3日間のippnwが終わった。様々な講演を聞き、沢山の仲間が出来、幾人かは日本で会う約束まで出来た。これらを通じて僕が感じたことは、行き着くところは教育ということだ。ippnwで世界中から真剣に核廃絶について考えられている方が集まり、皆さんが核の危険性などについて教育していくことの大切さを語られていた。他にもこの夏は差別問題や国際協力についても考えさせられる機会があったが、全て結局は教育が結論に来る。それだけ教育には可能性があるということなのだろう。それならば僕がしなければならないことは、周りを教育できるだけの勉強を僕自身がすることである。とても当たり前でシンプルだ。でもこれが僕がこの旅で辿り着いたところである。スパシーバ!!!

來間愛里

今日はついに最終日。雲一つなく晴れわたり、初日の寒さが嘘のように暑かったです。いつの間にか気に入ったこの町で過ごすのも最後と思うと淋しい気持ちになりました。今日の全体会議は今後どのように反核をすすめていくかという報告でした。結論としてはまずは情報を多くの人と共有していくことという感じでしょうか？本当にその通りだと思います。根本的な解決にならないかもしれないけれど、知らなければactionは起こせません。

3日間全体を通しての私の学びは自分がいかに知らないかということ、そして知らないことに気が付いていなかったということ。そして様々な人と話をしたり、意見を聴く中で自分の知らなかったことをたくさん知りました。核兵器のこと、放射能の影響、日本のや世界のことも。まだ全部ぼんやりとしています。今回IPPNWに参加したことは気づきのきっかけになりました。次の私の仕事は学んできたことをきちんと整理して広げていくことかと思っています。カザフスタンに行ってそしてIPPNWに参加して本当に良かったです。このような貴重な経験をさせていただいたことに心から感謝いたします。ありがとうございました。



fig.2: 世界をつなぐ折り鶴

横山 加奈子

いよいよ21th IPPNW in カザフスタン、最終日は Action、行動についての発表が多かったのですが、世界各国とてもユニークで楽しそうなイベントをたくさん報告していました。自転車ツアーで平和を訴える、いわゆるPチャリはもちろん、ケニアのキリマンジャロ登山プロジェクトなど。若者を中心に楽しく活動することで、Actionに参加するハードルは確かに下がります。しかしやはりこんな活動に至る前に(もしくは同時に)、なぜなかなか核兵器をなくせないのか、ウラン採掘をやめられないのか、などの社会的背景をしっかりとつかんでおかないと、自己満足のActionに終わるようにも感じました。そんな悶々とした気持ちもありましたが、全体を通して振り返ると、PANWの視野の広さ、先見性を感じたのが大きかったです。総会での人道的な戦略や、気候変動、それによる飢餓の話など、反核医師の会の講演などで聞いたものばかり。また、日本ではあまりなじみのない、「医師の社会的責任」については、世界ではこんなにどうどうと謳われているのか、と驚きました。グローバルスタンダードを知るとまた、活力が湧いてきますね。今回は若手研修医もそろっており、とろとろでディスカッションできたこともとっても楽しかったです。もちろん世界中の人との交流も。じわじわした活動が続きますが、一步一步着実に前進していると感じ、また研修医としてもしっかりとがんばっていこうと思いました。参加させていただき本当にありがとうございました。



fig.3: 閉会式

前田 和也

今回は事務局として参加させていただき、有意義な3日間を過ごせました。今回も折り鶴の力に驚かされました。各国の参加者が、苦勞しながらも鶴を折られる姿を見て、折り鶴は日本から平和を発信する手段としてとてもいい方法だと感じました。また、折り鶴を通してコミュニケーションをとれるのも魅力です。ブース担当で会議の中身はほとんど聞けませんでした。核兵器の非人道性が正面から問えるようになるなど、世界が核廃絶に向けて動いていることを感じさせるものでした。また、PANWのワークショップに62名が参加したのは、確信を持てるものになったと思います。

今回は、若手医師の輪に混ぜていただき、とても楽しい時間を過ごせました。核廃絶に向けて、これからも皆さんと力を合わせて歩みを進めたいと思います。

植田 大樹



fig.4: カザフでの最後の昼食

今回IPPNWに参加させていただき、本当にありがとうございました。最大の収穫はつながりができたことです。日本のみなさまとのつながり、世界の医師医学生とのつながり、核問題と自分とのつながりなどなど。海外に来ると毎度感じるのですが、海外では「日本人」というだけで日本の方々と親密になることができます。さらにその日本人が集まると、各々の友達を紹介しあえたり、一人では馴染みにくい海外の空気にもみなで溶け込むことができます。そんな中で、世界の人々とお互いに話をする事で海外の政治への意識の高さや、戦争や核問題への意識の高さを垣間見ることができました。あたかも自分の趣味をしゃべる時のように当たり前自国の政治の話をする人たちの一方、自らの専門医制度すらろくに知らない自分たち。広島、長崎の原爆から六ヶ所村、さらには福島など、世界的に見ても日本と核問題とのつながりの強さは類を見ません。しかし私は、私たちは、どれほど核問題への問題意識を持っているのでしょうか。私の中のどこかには福島を過去のことと捉え、考えることをやめつつあったのでは、と身を引き締めました。多くのつながりから、自分を省みることのできたIPPNWでした。



fig.5: 首都のシンボル: バイテレク(生命の樹)